

暁木会会員 各位

平成 25 年 9 月 吉日

暁 木 会

<http://www.gyoubokukai.jp/>

平素は、暁木会の活動にご支援とご協力を賜りまして厚く御礼申し上げます。

今回の暁木会ニュース第 25 号では平成 24 年度総会、スタートライン、研究報告、在学生の現場見学会、現役学生生活、海外からの報告など、特に若手に読んで頂きたい内容が盛りだくさんとなっております。ぜひご通読頂けますようお願いいたします。

平成 24 年度総会

平成 24 年度の総会と懇親会を例年通り湊川神社の楠公会館で開催いたしました。今回の総会でも、昨年度と同様に卒業生・修了生とご来賓・教員・会員が対面する形での配席としました。対面席にすることで、新会員の皆さんは緊張感をもって、諸先輩方に臨まれたことと思います。

総会では、来賓紹介、会長挨拶の後、5つの議案について全会一致で可決されました。また、大学近況報告では、道奥先生から学術振興基金の使途など、非常に丁寧な説明があり、新会員紹介では、就職先を記載した新会員名簿を配布し、新会員からも大変意気込みのある自己紹介を頂きました。さらに、総会で優秀学生表彰も実施し、受賞理由と表彰状の読み上げを行い、受賞者の方々にとって晴れの舞台となりました。今年度卒業、修了予定の方も、受賞を目指し、日々の学生生活を頑張りたいと幹事一同願っております。

今年度の暁木会役員は会長に新制 25 回の安倍茂様、副会長に新制 29 回の油井洋明様、新制 32 回の伊藤裕文様に、9 人の常任幹事で構成されることになります。なお、議案の内容は HP の資料をご覧ください。



■ 華やかな新会員の面々

日 時：平成25年3月26日 総会18:00～19:20、懇親会19:30～21:00
 会 場：湊川神社 楠公会館
 出席者：ご来賓(名誉教授、教官) 32名、会員49名、卒業生・修了生97名（合計178名）
 議 事：1.会務報告、2.会計報告、3.監査報告、4.役員改選、5.予算案
 次 第：・大学近況報告、支部活動報告、KTC報告
 ・卒業50周年祝金贈呈（新制11回生 代表：弘重敦士様）
 ・暁木会賞：菅洋子様、KTC賞：松本修平様、市民工学教室賞：佐々木剛様
 優秀修士論文賞：石井翔大様、松谷幸一郎様
 ・新会員歓迎の言葉：藤田達也様C院27

会員数：卒業・修了者：4,582人、会員数3,636人（平成25年4月1日現在）

H25年度役員 会長:安倍 茂㉔、副会長:油井洋明㉑・伊藤裕文㉒、KTC副理事長:本下稔㉓、KTC理事:足立吉之㉔、水池由博㉕、常任幹事:古川雅一㉖、山下剛㉗、宇都善和㉘、矢野芳広㉙、伊賀正師㉚、久保真成㉛、山口充㉜、恒藤博文㉝、中山徹97C



■ 総会会場の様子



■ 会長と新副会長、新幹事あいさつ



■ 大学近況報告 道奥康治先生



■ 優秀学生表彰



■ 懇親会来賓挨拶 川谷健名誉教授



■ 懇親会中締め IV山本潤吾様

スタートライン

「地図に残る仕事」のスペシャリストを目指して

大成建設株式会社東京支店 東急渋谷作業所 西 勇哉 C11



神戸大学を卒業し、大成建設に入社して二年になります。私は東急東横線の地下化及び東京地下鉄副都心線との相互直通運転に向けた渋谷駅の地下化工事（幅 32m・延長 222m・深さ 17.5m）に従事しています。渋谷駅の地下化は平成 25 年 3 月 16 日に完了し、今は埋戻しや路面の復旧工事を行っています。私の業務は、施工計画、工程管理、安全管理、品質管理です。施工計画は、工事を行う上で一番重要な業務です。計画がしっかりしていないと現場で施工



図 1 現場施工状況

ができない事態になります。そして、施工が始まれば工期内に終わるよう進捗を管理する必要があります。事故がないよう安全面を管理する必要があります。また、発注者が設定している所定の品質を満たすために、品質の管理も重要な業務です。私が担当した工種はホームおよび階段の躯体構築工、流動化処理土による埋戻し工です。

今回の工事で一番苦労したのが、渋谷駅のホームの構築です。ホームの構築は電車が通行するため出来形管理が内空で 0～+10mm と非常にシビアだったからです。（一般部は 0～30mm）測量に失敗すると、電車が通れないという不安もあり、連日現場の作業が終了してから夜中まで測量を行いました。そうした苦労が実を結んで構築が終了し、先日相互直通運転が開始しました。一番列車が自分の造ったホームに入ってきた瞬間、言葉では言い表せない喜び、感動が広がりました。

正直、現場での仕事は大変です。朝から現場に出て、現場が終わってからは施工計画、書類作成と業務が深夜に及ぶこともあります。しかし、苦労して構造物を完成させた感動は何物にも代えられません。この感動を糧に「地図に残る仕事」のスペシャリストとなる様、日々精進していきます。

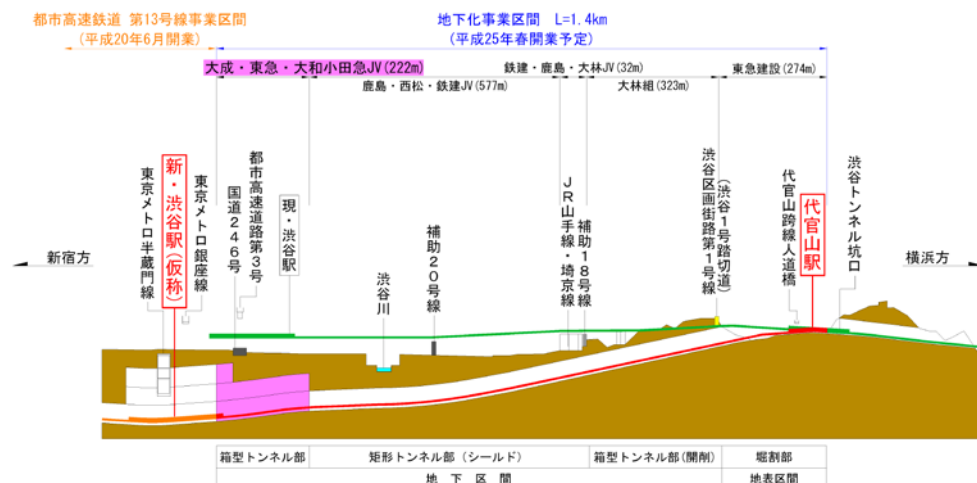


図 2 施工範囲図

研究報告 (エネルギー資源と環境問題の両面を持つ「メタンハイドレート」)

助教 片岡 沙都紀

4月1日付けで市民工学専攻・助教に着任いたしました片岡です。この場をお借りして私の紹介を少しさせていただきますと、2009年3月に北見工業大学で博士後期課程修了の後、函館工業高等専門学校で4年間助教として勤務し、このたびの神戸大学着任といった職歴です。この世に生を受けてから初めて北海道の地を離れて生活することとなり、今は見るもの感じるもの全てに「新鮮さ」を感じながら毎日を送っております。

専門は地盤工学ですが、私は学生の頃より「メタンハイドレート」に関する研究をテーマに、自然界に形成するメタンハイドレートの生成要因やメタンハイドレート周辺地盤の工学的特性を知るための調査、実験などに携わってきました。メタンハイドレート(写真1参照)とは水分子が作る格子状のかごにメタンガスが取り込まれて形成された氷状の固体物質で、低温・高圧環境下で安定なため自然界では永久凍土域や海底・湖底堆積土中に存在しております。現在では次世代エネルギー資源として注目されているメタンハイドレートですが、一方ではメタンガスが二酸化炭素の数十倍もの温室効果をもつガスであることから、特に海底・湖底の表層に分布するメタンハイドレートが地球温暖化に伴う水温の上昇によって分解し海水中に遺漏すると、更なる地球温暖化やそれに伴う海水・湖水レベルの上昇、気候の不安定化などを引き起こす可能性があります。また、メタンハイドレートが存在する領域がプレートの境界付近に多く分布しているため(図1参照)、地震活動による海底地すべりなどによって海底地盤が崩壊し、海底表層のメタンハイドレートが分解すること考えられます。このように、メタンハイドレートは地球環境変動と密接な関係があることから、**海底下表層に賦存するメタンハイドレート周辺地盤の安定性を評価**することが極めて重要になります。しかし、現在のところこのような視点からの研究は少ないのが現状です。私はこれまで、他研究機関とともにバイカル湖や日本海、オホーツク海などのメタンハイドレートが存在している領域の地盤をターゲットにし、海底・湖底堆積土の土質試験等からメタンハイドレートが賦存する地盤の土質に関する共通点や特異点について検討してきました。

現在はこれらのデータをもとにメタンハイドレートが海底地盤で分解した際に起こりえる現象とそれが起因して引き起こす地盤災害との因果関係等について室内試験を中心に検討しており、これら研究の成果が今後海底下表層に存在するメタンハイドレート賦存地盤における安定性評価の際の「指標」となるべく、日々研究に従事していく次第です。



写真1 メタンハイドレート燃焼の様子
(写真中、白い部分がメタンハイドレート)

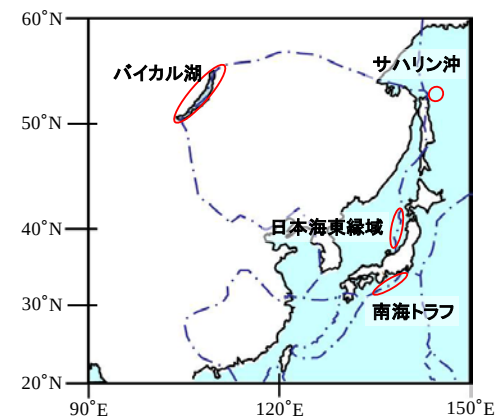


図1 日本近海におけるメタンハイドレート存在域とプレート境界

私の学生時代

暁木会 常任幹事（広報担当）矢野 芳広 ㊟

今回は旧制 16 期生の方の『学生時代』を紹介させていただきます。ことの経緯は、今年に入り旧 16 期の森繁一様（編集委員代表）より電話連絡を頂いたことから始まります。広報部への依頼として、激動の戦中・戦後に大学生活を送った我々の当時の『思い』（平成 10 年再編集、自主出版）を後世に残し、誰でも簡単に読めるようにして頂きたいとの事でした。その後、実際にお会いし、出版図書 1 冊を受け取りました。早速、本文の回想録を読ませて頂きましたが、戦後生まれの私たちには想像を越える日常を生き抜かれたこと、そしてその歴史的転換期を多感な学生ゆえに苦悩された、その姿がひしひしと伝わってきました。またそれと同時に、現代社会では失われつつある『何か』を当時の方は、しっかりと持っておられたし探究心に関しては、遥かに昨今の我々を超越していると実感しました。紙面の都合上、本文内容を紹介することはできませんが当時の情勢を簡単な年表まとめましたので、ご参照ください。いかに特異な時代背景で学生時代を送られたか認識できると思います。

尚、暁木会ホームページには序文・目次等を紹介しますので、そちらも是非ご一読お願いします。更に、本文すべてを閲覧し読みたいという方は KTC 事務局まで申し込みを、電子データで配布させていただきます。(tel:078-871-6954、電子メール ktc@mba.nifty.com)

【神戸工業専門学校土木科16期生】

西暦(邦暦)	月	出来事 (※青字:16期生の主な関連記事)
1941年(昭和16年)	12月	・真珠湾攻撃 太平洋戦争 開戦。
1942年(昭和17年)	6月	・ミッドウェー海戦。
1943年(昭和18年)	4月	・連合艦隊司令長官、山本五十六大将 戦死。
1944年(昭和19年)	12月	・第一次学徒出陣
	4月	※神戸工業専門学校土木科16期生入学。 (現 神戸大学工学部市民工学科)
	7月	・サイパン島日本軍守備隊玉砕
	8月	・東條英機内閣総辞職
	8月	・テニアン島日本軍守備隊玉砕
1945年(昭和20年)	7月	・グアム島日本軍守備隊玉砕
	10月	・日本海軍の神風特別攻撃隊初出陣
	11月	※16期生、三菱造船所および川崎造船所へ出動
	3月	・神戸大空襲、西代の本校舎、大部分を焼失
		・硫黄島日本軍守備隊玉砕
		※土木科長 櫻井季男教授 応召
	6月	・沖縄戦線 組織的抵抗終了
	7月	※16期生、呉、大阪および舞鶴の各海軍施設部へ配置転換
	8月	・広島に原子爆弾投下
		・長崎に原子爆弾投下
1946年(昭和21年)		・ポツダム宣言受諾、無条件降伏の玉音放送
	9月	・戦艦『ミズーリー号』上にて降伏文書調印
		※櫻井教授 復員
	11月	※運動会、土木科16期生総合優勝
	5月	※生徒大会、校友会、復興委員会、共済会の各会設立
1947年(昭和22年)	11月	※運動会、土木科16期生総合優勝
		・新憲法公布
	12月	※演劇コンクール、土木科『老人の画像』が第一位
	3月	※土木科16期生卒業、ガリ版印刷の『回想録』発行
↓		
1997年(平成9年)	4月	※土木科16期生50周年同窓会
1998年(平成10年)	4月	※ガリ版『回想録』を『激動の青春譜』として自主出版
2013年(平成25年)	4月	※土木科16期生、米寿記念同窓会 (下記の集合写真、参照)



神戸大学暁木会 16 回生同期会 平成 25 年 4 月 1 9 日 於「摩」

枝村先生を偲んで

三島和男 ㊤

去る 4 月 17 日に枝村俊郎先生（名誉教授、平成 4 年 3 月退官 享年 86 歳）の訃報に接し、余りに突然のお別れに驚き、最近の無沙汰を悔やむとともに、約 40 年前に先生と過ごした枝村研究室（交通工学講座）の 3 年間を懐かしく想い起こしました。

研究室の活動内容は週 1 回の罰金付ゼミが中心で、夏休みにはサマースクールと称して数日間の合宿なども行っていました。手土産を持って来られた先輩方と交流する機会でもありました。酒を飲んで皆でコーラスをしたり、放課後にはテニスを楽しみ、春休みにはスキーツアーにも出掛けました。また、先生は多趣味であり絵画や映画等についての話を伺ったりすることも多く、趣味を持ち人生を豊かに生きることの大切さを感じました。卒業してからのゴルフなども含め先生と過ごした時間は私にとってはかけがえのない貴重な財産です。これは枝村研究室卒業生に共通する思いでもあります。

枝村先生、どうもありがとうございました。安らかにお休みください。合掌。



西本憲生 ㊦

私が研究室でお世話になった昭和 52～53 年頃、先生はテニスやスキー、男声コーラスに至るまで実に様々なことを、学生に混じって楽しんでおられました。私もグリークラブにおりましたので、サマースクールでは「マイボニー」などの曲をハモらせ一緒に楽しませて頂きました。枝村研究室は、何かと話題の多い他の実験系研究室とは違い、派手派手しさは無いものの何処となくホンワカとした温かみがあったように思います。

昨年の 10 月末、六甲荘での枝村会が私には最後のお別れとなってしまいました。久々の大学訪問については、とても雰囲気の良いキャンパスになっていたと満足そうに語られましたが、いつも心の片隅で神戸大学のことを気に留めておられたのだと思います。お開きの後、二次会へ繰り出そうとお誘いもしたのですが、ワシはもう此処でのんびりするからと言われ、どこことなく寂しげな表情で遠くを見つめられているお姿が印象的でした。

いつもご無沙汰ばかりで決して良い教え子ではなかったかも知れませんが、今後も先生への感謝の気持ちを忘れずにいたいと思います。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



昭和 55 年枝村会

北田正広 ㊧

枝村先生に最後にお会いできたのは、昨年 10 月に先生の帰神に合わせて開かれた枝村会でした。たまたま先生の隣の席が空いていたので、いろいろとお話しをする機会をいただきました。

「君らが卒論書くとき、『技術論文では天下国家を論じるな』言うたけど、今は自分がホームページで思いのまま天下国家を論じてるんや。」「信州に行ったサマースクールで、みんなと一緒にテニスをしたりしたのが楽しかったなあ。」「研究室で、みんなと飲んだり歌ったりしたのもおもしろかったわ。」などなど。印象的だったのは、「どれもこれも、みんな、ありがたいことでした。」という先生の言葉でした。

体全体が少し小さくなられたなあと思いながらも、「今度、先生とはいつお会いできるんだろう。」と、ずっとお元気でいていただけることを、当たり前のことのように思っていたので、先生急逝の報に接した時は、あまりの突然のことで声もでませんでした。

千葉で執り行われた告別式に、参列させていただいた時も、枝村会の方がたくさんおられて、ああ、こんなにも先生はみんなに慕われていたんだなあ、と思わず落涙。先生との思い出をつづった 30 回生（有田、杜若、橋本、瀬野、安川、北田）からの弔電を式場で読んでいただいて、さらに落涙。

枝村先生のお墓は舞子墓園だとお聞きしました。幸いにも家の近くですので、この夏にはお参りさせていただこうと思っています。あの遠い学生時代の色鮮やかな思い出とともに。



平成 12 年枝村会

手塚明宏 ⑫

枝村先生有り難うございました。私（たち 32 回生）は、元気だけが取り柄の決して出来の良い学生ではありませんでしたが、土木工学の中にあってちょっと異質な都市計画・交通工学という講座であることと、枝村先生の知的で何とも言えないおらかな雰囲気惹かれて枝村研究室を選んだように覚えています。

私たちは、枝村先生の真っ直ぐで、何に対しても興味を持たれる姿と、先生からぼそっと発せられる一言が好きでした。私たちは勉学では貢献出来ませんでしたが、「枝村研究室は他の研究室と違うところを見せなければいけない」という変な意識と団結力だけがありました。

私たちが研究室に在籍していた頃、枝村先生と一緒にテニス、スキーをとすることはありませんでしたが、バカをしている私たちをにこにこ笑って見守ってくださっていたように思います。そんな先生も時には私たちのバカ騒ぎの中に入ってこられ、ダーさん（枝村先生もこの愛称で呼ばれていた）の巨人の星の歌にあせたウサギ跳び、国松様のお通りだいの歌にあわせた行進など、先生と一緒に宴会場を巡ったことが思い出されます。そうそう、ゴルフにもご一緒させて頂きました。枝村先生のエアコンのない車で信州にサマースクールに行ったこともありました。卒業してからは、枝村会での先生からのお言葉や、年賀状での激励、叱咤のコメントを楽しみにさせて頂くとともに、意を新たにがんばろうと励まされたこともありました。

H24 六甲荘での枝村会で、冗談まじりに小さな業界の会長に就任したことを報告すると「何でも長のつくものになるのは大したものや」と褒めてくださったのが先生との最後になってしまいました。

枝村先生とお会い出来なくなるのはとても寂しく、残念で、心に大きな穴が空いてしまったように感じます。枝村研究室で忘れがたい学生生活を過ごさせて頂いた私たちは、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



先生が描かれた北野六甲荘(H12)



昭和 59 年サマースクール(信州)

KTC の機関誌 NO.77 にも正木啓子様⑬、福島徹様⑭から頂いたお言葉を掲載しています。

同窓会報告

建設学科平成6年入学生（94 生）同窓会を開催しました

昨年の年の瀬、平成 24 年 12 月 29 日に、建設学科 1994 年入学生による同窓会を大阪で開催しました。北は北海道から、南は中国、四国から遠路遙々、総勢 56 名が大阪に集いました。前回 4 年前の第 1 回に続き、今回で 2 回目の開催です。

「建設学科」ということもあり、入学時は建築・土木に分かれていなかったことで、建築・土木専攻の同級生（建築 43 名、土木 13 名）が一堂に集まることが本会の特徴です。

このため、幹事を含め、女性が多いことから、お洒落な会場選定、お子様の同伴 OK、プロジェクターを用いて懐かしい写真の上映会など、女性ならではのきめ細やかな配慮や演出が随所に見受けられました。

一方、ステージでは、各人の近況報告もあり、切れ味鋭い営業トークなど、当時とは違った一面を見せてくれた同窓生もありました。また、お子様を同伴された方は、会を楽しみながらも、親として子供と接しているところを目の前で見ると、卒業してからの時間の流れを感じた次第。（今のところ）見た目は変わらずとも、30 台の後半に差し掛かり、この会を通じて卒業後のそれぞれの足跡を少しだけ垣間見えたような気がします。

今回の 1 次会も盛会のまま、あっという間に楽しい時間は過ぎてしまいました。1 次会の写真を以下にアップしておりますので、是非ご覧下さい。

<https://plus.google.com/photos/104764799949178304363/albums/5830558685663423937?authkey=CJLag73Z3f2d1wE>

ちなみに、2 次会以降も楽しみ過ぎて、最後は男同士仲良く（？）雑魚寝された方もいたようです（お酒の飲み方は学生の時のままのようです）。

さて、少し先ではありますが、次回は 4 年後の 2016 年に開催予定です。そう、本会はオリンピックと共に歩んでおり、4 年後と言えば、リオデジャネイロオリンピックです。オリンピックのように、今後も継続して開催していきたいと思います。

次回幹事も既に決まり、次回開催に向けて活動中（の予定）。。。。

今回は都合がつかず、残念ながら不参加となってしまった皆様も、次回こそ是非ご参加ください。参加すれば、懐かしい話に花を咲かせたり、今後に繋がる再会があったり、と大変有意義な機会になると思います。早速予定を入れておきましょう。

最後に、今回幹事の皆様、誠にお疲れ様でした。この場をお借りして、御礼申し上げます。そして、次回幹事の皆様、4 年後までには再会できますよう、引き続き宜しくお願いします。

（文責：秋田 伸 C98）



現役学生生活紹介（就職活動報告）

西井達也（市民工学専攻 M2，内山研）

私は東京海上日動火災保険株式会社より内々定を頂きました。損害保険業界に興味を持ったきっかけは、昨年の夏休みに東京海上日動のインターンシップに参加したことです。インターンシップでは、損害保険が人々の生活や企業活動を支えている重要なインフラであることを実感しました。また、台風・洪水・地震・津波といった自然災害のリスクマネジメント業務やアクチュアリー業務などでは、土木工学の知識や理系出身者が数多く求められていることに魅力を感じました。就職活動の際に私が企業選びの軸にしていたことは、「社員が魅力的である」でした。インターンシップや OB 訪問でたくさんの社員とお会いしたのですが、東京海上日動の社員の方々はみな自身の仕事を熱く語って下さり、やりがいと誇りを持って生き生きと働いていることが伝わってきました。更に、高い目標に向かって日々努力を惜しまない姿勢に魅力を感じ、このような環境で働くことで自分も成長したいと思い、入社を決意しました。

就職活動を行う上で、先輩、友人、家族、先生など多くの方にお世話になりました。特に、私の指導教官である内山先生が主催して下さいった市民工学専攻・市民工学科の有志学生を対象とした「キャリアアッププログラム」が非常に有意義でした。自己 PR 発表会、グループディスカッション、企業人事担当者による講演会といった様々なプログラムに積極的に参加することにより、就職活動に対する意識が高まると共に、参加学生間での新たなネットワークが築かれ、お互いに切磋琢磨して就職活動を乗り切ることができました。

残りの学生生活は、悔いのないように研究活動も遊びも全力で頑張りたいと思います。私は体育会ゴルフ部に所属していたため、ゴルフが趣味なのですが、最近は同級生と打ちっぱなしやラウンドに行くことが楽しみの一つです。



ラウンド風景（左：本人）

高田 昌典（市民工学専攻 M2，澁谷研）

私が高校時代に市民工学科を志望したのは、大学で学んだことを将来にわたってずっと活かせると考えたからです。阪神淡路大震災等のように自然災害の多い日本では、どの時代になっても土木の仕事は欠かせないものであり、また社会インフラ設備の建設・補修をすることによって直接的に社会貢献ができると考えていました。

大学・大学院での授業や研究室での研究活動を通して、“土木業界は体力面・精神面で辛いことがある半面、プロジェクトが完了した時、達成感をより一層感じることができる”ことを肌で感じました。このような経緯があったため、土木業界で活躍できる仕事を中心に就職活動を進めてきました。また実際に企業の第一線で活躍されている社員の方々に OB 訪問という形で直接お話を伺い、土木業界の仕事のポジティブな面・ネガティブな面を知ることができました。その中で私は、建設業界に関心を抱きました。建設業界は、一般的

に 3K（危険・きつい・汚い）といわれていますが、現場の施工管理の他に、研究開発・設計等幅広い仕事内容があることを知り、また現場の最前線で土木構造物の建設に取り組めることが魅力的に感じたからです。OB 訪問・面接での会社の雰囲気等を総合的に考慮して、三井住友建設に就職することを決めました。

就職活動を通して、今まで自分がどのようなことを取り組んできたかを再認識することができて良かったと思います。また就職活動の際の個人面接・集団面接を通して、人に理解してもらうために簡潔に・丁寧に話すことの重要性を実感することができました。

就職活動の際には、先生に相談にのって頂き、時には社員の方を紹介して頂き、直接お話しする機会を得ました。同じ時期に就職活動を進めていた同期の仲間と何回も面接練習をし、面接を受ける際には自信をもって臨むことができました。

今後は、私が推進している研究を修士論文にしっかりとまとめ、また入社してから辛いことがあると思いますが、“就職活動の際に抱いた気持ち”を忘れずに頑張りたいと思います。

天野 和信（市民工学専攻 M2，井料研）

私は市民工学科に入学した時から、土木に関係する仕事の中でもインフラ業界に強い関心がありました。就職活動を通していくうちに、特に鉄道業界に対して大きな魅力を感じました。鉄道は街の中心にあり、人々の生活に密着し、社会に貢献しています。また、人を安全に運ぶという責任のある仕事です。このような思いのもとに就職活動を行った結果、JR 東日本から内々定を頂きました。

市民工学科卒業生の先輩方には親身になって相談に乗っていただいたり、ES の添削をして頂いたりしました。専攻内の同期とは、就職活動仲間として助け合い、時にはライバルとして切磋琢磨することで自分自身の成長にもつながりました。就職活動を通して人との繋がりと和というものが大切であると実感しました。

就職面接時の自己 PR の際には、セルビアでのボランティア活動や外国人の方々を日本の観光地へ案内する活動など、私が関わった国際交流に関する経験について話をしました。学生時代から海外の文化や生活に触れたいと考え、このような活動を行ってきました。これから社会人として社会に出ていきますが、日本国内だけに留まらず、海外とも積極的に交流を持ち、繋がりを広げ、成長していきたいと考えています。



※写真はセルビアボランティア時のもの（本人は手前中央やや右側）

市民工学概論見学会

一年生を対象にした市民工学概論の見学会の報告をいたします。概論見学会の実施にあたりましては、暁木会会員の皆様の多大なご協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。（教授;大石哲）

明石海峡大橋見学会（6月1日（土））

一流のシェフになるためには一流の味を知らなければならない——明石海峡大橋は橋長 3,911m, 中央支間長 1,991m を誇る世界最大の吊り橋である。水深 60 m の海底に最大 12 万トンの鉛直荷重に耐えうる基礎を設置して主塔を立ち上げ、耐用年数 200 年を目指してケーブル内送気乾燥システムによる新しい防食維持管理技術を導入するなど、世界最高水準の橋梁技術、建設技術の粋を集めたモニュメントである。本四高速および関連企業



写真1 2P主塔最上部での集合写真

OBの方々の案内により併設された橋の科学館において技術的な説明を受けたあと、舞子側1Aアンカレイジから内部に入り、海面上約80mに設置されたグレーチング床板の作業通路を約1km歩き、海面上300mに位置する2P主塔最上部に登った。勇壮麗美な神戸・淡路の景観を楽しみ、先達の傑作である3径間2ヒンジ補剛トラス吊橋を楽しみ、土木工学の醍醐味を堪能した半日であった。この世界最高の料理の味を知った土木技術者の卵たちがどんなシェフに成長していくのか。楽しみは尽きない。（准教授;内山雄介）

神戸空港島見学会（6月15日（土））

週前半の台風の接近により開催が危ぶまれたが、当日は曇り空のもとにポートライナー神戸空港駅改札前に集合して見学会が開始された。説明会場へ移動し、神戸空港プロジェクトの歴史と現状について、神戸市みなと総局の長谷川憲孝氏から熱心な説明があった。都市施設・物流拠点としてのポートアイランド・六甲アイランドの建設後に都市インフラとして神戸空港が建設された歴史の流れがわかりやすく説明された。また、阪神淡路大



写真2 展望デッキでの説明

震災後は防災拠点として注目されていることが指摘された。さらに、工事のオートメーション化が進んでいるが、海中の護岸建設の一部は潜水土による人力作業が行われているという説明があり、学生の興味を引いたようであった。続いて、施工業者として大林組の原

田所長から、軟弱埋立地盤上での GPS 測量を用いた施工管理について具体的に説明された。この説明会の途中から雨が降り出したため、当初、現場へ向かう予定であったが、急きよ、展望デッキへ移動して、現場の現在の状況に関する説明が行われた。雨の中ではあったが、説明後に熱心な質疑応答が行われた。（教授;澁谷啓・准教授;加藤正司）

阪神連続立体交差事業（6月15日（土））

神戸市建設局道路部と阪神電鉄のご厚意により阪神連続立体交差事業の見学を行いました。当初、阪神魚崎駅から阪神芦屋駅まで連続立体交差事業の進捗状況を徒歩で見学する予定でしたが、大雨の影響で、工事事務所での説明に変更して実施されました。また、参加された関係者に、学生から事業の件だけでなく、就職など将来に関する質問も受けていただきました。学生からは、「雨で実際に現場を見られなかったのは残念でしたが、計画から施工までどういう順序で工事が行われるのか、どのような行政・会社がかかわって工事が行われているかなど幅広いことから専門的なことまで話を聞くことができてよかった」、「神戸市での公務員として働くためには、神戸を愛する必要があると聞いて、深く反省しました、今まで何も考えず神戸に憧れていたの、これからは日々精進して立派な神戸の街づくりをしたいと思った」などの感想が寄せられました。（教授;小池淳司）



写真3 工事事務所での説明の様子

姫路駅連続立体交差事業（6月22日（土））

市民工学概論の見学会として「姫路駅付近の連続立体交差事業、周辺整備事業」の現地視察を引率しました。当日は、JR姫路駅に集合した後、まずは、新幹線高架下の JR 西日本会議室で事業の説明を聞きました。その後、JR 新駅ビル「ピレオ」の屋上で整備状況を俯瞰し、新しくできた木目調の展望・連絡デッキを見た後、最後に地下レベルにできた庭園「サンクガーデン」を見学して、そこで解散しました。前半の説明では、都市計画の歴史的背景や事業に至る一連の経緯、駅前まちづくりにおける官民協働や市民との合意形成、線路の切り替え工事における苦労話など、実際に事業に関わった暁木会の先輩からナマの声を聞くことが出来ました。参加した学生は都市・地域計画に興味をもって入学してきた人も多く、これから学ぶ専門と将来つく職業を具体的に想像できる非常によい機会でした。（准教授;宮本仁志）



写真4 展望・連絡デッキでの集合写真 遠方かすかに世界遺産 姫路城を望む

海外からの報告 1

(米国における道路橋点検事業への参入)

NEXCO-West USA, Inc. 松本 正人 ④③



私は米国の首都ワシントン D.C.に拠点を置く現地法人、NEXCO-West USA, Inc.に籍を置き、NEXCO 西日本グループが開発したコンクリート構造物の非破壊検査技術のプロモーションと、米国における道路構造物点検及び維持管理に関する研究を実施しています。米国では、1971 年に制定された全国橋梁点検基準(NBIS: National Bridge Inspection Standards)に基づき、道路橋の点検が 2 年に一度の頻度で実施されていますが、この点検基準は、目視点検を基本とした全般的かつ主観的な情報に依存したものであり、部材ごとの定量的な性能の評価や、点検の客観性の確保に課題が残っています。現状では、道路橋の健全度を定量的に評価するための非破壊検査技術は、ようやく研究段階から実用レベルに移行している段階であり、当社の高解像度画像と赤外線技術を用いたコンクリート構造物の点検手法に対して、米国の政府機関、研究機関、民間コンサルタント等から強い関心が寄せられています。現在実施している主なプロモーション活動は、米国内及び海外の国際会議や展示会等における技術プロモーション活動(写真 1)と、米国の道路管理者やエンジニアリング会社への営業活動(プレゼンテーションや現地でのパイロット・プロジェクト(写真 2))です。上記の活動に加えて、2012 年よりセントラル・フロリダ大学との共同研究を開始し、フロリダ州における実橋での適用を通じて、技術の適用範囲の拡大、点検結果の出力フォーマットのさらなる改善と補修計画立案への反映方法等について共同で研究開発を行っています。共同研究の一環として、2012 年 8 月に実施した実橋試験では、道路管理者であるフロリダ州運輸省の橋梁点検技術者が実施した目視点検の結果との照合作業が行われ、新技術によるコンクリートのひび割れ検出及び浮きの検出精度が確認されました。今後、フロリダ州の橋梁点検データベースへの反映、橋梁の劣化予測及び橋梁マネジメントシステムへの統合等について、引き続き検討していく予定です。このような地道なプロモーション活動が実を結び、米国にて事業を開始して 2 年目となった昨年度には、米国内において橋梁点検業務を 2 件受注することに成功し、徐々にビジネスが軌道に乗ってきました。神戸大学在学中に、高田先生、宮本先生、森川先生らにご指導いただいたことが、米国でのコンクリート構造物診断の実務で大いに役立っています。

私は、これまでずっと技術者としてのキャリアを積んできましたが、米国の現地法人においては、商習慣や法令の異なる国において経理、総務、法務、人事、契約、会社経営という新たな分野の仕事も幅広く担当することになり、赴任当初は慣れない仕事と商習慣の違いなどに正面から向き合い、正直、苦戦する場面もありました。さらに、日本国内では道路橋の点検を計画し、業務を発注してマネージメントするのが仕事であった自分が、米国に来てからは、自らが営業して契約を獲得し、加えて現場作業や技術報告書作成、道路管理者へのコンサルティングなどのすべてを実施しなければなりません。毎日が経験したことのない仕事の連続ですが、それでも日々迅速に正確な意思決定をしていかなければ事

業運営はできません。そんなとき、前例やマニュアル類に頼ることはできないため、現地の専門家やコンサルタントの意見を参考にすることがありますが、それでも結論が出ることは少なく、最終的に意思決定の拠り所にできるのは、自分自身の人間としての価値判断基準ということになります。また、米国という国は、契約社会で仕事もドライに割り切っているという先入観をお持ちの方もおられるかもしれませんが、実際には、どこの国においても仕事の原理原則は同じで、大切なのは人との信頼関係であり、確かな技術力と同様に、コミュニケーション能力、提案力、人脈形成能力、仕事のスピード感、そしてグローバルに通用する価値判断基準を有していることが重要であると改めて実感しています。先の読めない今の時代、一人ひとりが自立して不確実な未来を切り開いていく必要があります、そのような人材の育成が必要ですが、一般に日本の組織は新しいことを提案して他者と積極的に議論し組織をリードしていける人材が育ちにくい環境であると思います。スポーツの世界に目を向けてみると、野球選手はメジャーリーグへ、サッカー選手は欧州のクラブへの移籍を目指す時代になりました。既存の枠から飛び出し、海外で挑戦して自分をさらに高めようとする姿が人々に夢を与え、一定の評価も獲得しています。このような潮流の中にあって、建設業界が次世代を担う若者にとって魅力のある業界であり続けるためには、技術者一人ひとりがその個性と能力を発揮して世界に挑戦し、国際社会で評価を受けて活躍する機会を増やしていくことが必要であると常々考えています。現在、米国及び日本の大学生のサマーインターンや、社会人の研修生をワシントン DC の事務所にて受け入れ、次世代を担う技術者の育成にも力を注いでいます。

海外に出て仕事をするものの醍醐味は、これまで経験できなかった仕事への挑戦や、国内では遭遇することのない困難な問題の解決などを通じて、一人の技術者として大きく成長していけることではないかと思います。今後も、厳しいながらも大きなやりがいを感じつつ、常に新しい課題にチャレンジしていきたいと思っています。



(左) 写真 1 - ASNT（全米非破壊検査協会）の会議におけるブース営業の様子（FHWA の技術者との議論）



(右) 写真 2 - メリーランド州におけるパイロット・プロジェクトの様子

海外からの報告 2

(留学体験記)

Western Australian School of Mines 博士課程後期 楠井 彩子 C09

私は2005年度に入学し、神戸大学工学部および神戸大学大学院で6年間学びました。2012年より西オーストラリア州にある Western Australian School of Mines にて博士課程後期に在学しています。神戸大学に在学中は芥川真一教授の下で現場における情報可視化による新たな安全管理手法について学んでいました。

海外には興味がありましたが、留学を決意したのは大学院在学中に JICA のインドのデリーメトロプロジェクトに参加したときです。現地に3ヶ月間滞在し、神戸大学の先輩である阿部玲子さんの下で業務調整をやらせていただきました。インドでは女性が工事現場で働くというのはとても珍しく、阿部さんと二人で歩いているとたくさんの視線が注がれているのを感じました。しかしエンジニアとして現場を仕切っている阿部さんは「マダム」と呼ばれ皆から一目置かれているのに比べ、私はただの女の子としか見られていないのだということに気づき、何もできない自分が不甲斐なく非常に悔しい思いをしました。そのときに「私もいつか海外でエンジニアとして頼られる存在になる!」と心に決めました。

Western Australian School of Mines では鉱山学部には所属しています。オーストラリアでは資源開発が盛んで、鉱山は人気の学部のひとつです。鉱山学部はメインキャンパスのあるパースから600km東にあるカルグーリという人口3万人の街にあります。この一帯は昔からゴールドフィールズと呼ばれ、周辺には100以上の鉱山が稼働しています。神戸と比べると何もなく車で15分で市内を横断できてしまうような場所ですが、現場のすぐそばに位置しているので勉強には最適の環境です。カルグーリキャンパスには約300人の学生がいます。留学生が占める割合は60%でその半数は中国人、残りはインド、アフリカ、東南アジアと続いています。日本から来た学生は私一人です。日本は資源を輸入する側なので、鉱山事業に関わっている日本企業といえば商社関係ばかりで現場で働いている日本人というのは今のところ耳にしたことがありません。

私の研究テーマは地下鉱山における大変形許容支保システムの構築で、今は室内実験の準備をしています。必要な用具は自分で作らなければいけないので、フォークリフトの運転や鉄の切断や溶接といったことも自分でやっています。今では「tuffy (=タフな女の子)」というあだ名も付くようになりました。



デリーメトロプロジェクトにて



カルグーリ (左側) とその近郊の金鉱山 (右側)

外国生活に慣れるのは予想以上に大変でした。言葉の壁というのは予想していましたが、それよりも大変なのは文化の違いです。オーストラリアでは社交性とビジネスの関係性が強く、パブで知り合った人が仕事のパートナーになるといったようなことがよくあります。1対1で会話する分には問題はないのですが、複数人と話すときはまず話題になっていることを知らないといけません。政治の話だったり、昨日のテレビの内容だったり、スポーツの試合結果・・・もちろん自分の研究を進めることも大事ですが、ここで生活している以上、自分自身を“オーストラリア化”することも大切だと感じました。恥をかき多少居心地が悪くても、進んで社交の場に参加するように努めています。ようやく少し慣れてきましたが、日本が恋しくて泣きながら家族に電話をかけることもよくあります。しかし今年の5月にパースで行われた学会で恩師である芥川先生にお会いしたときは離れた場所においても世界はつながっているのだと改めて感じました。また今ではインターネットがあるので家族友人とも連絡を簡単にとることができ、以前よりは留学環境は大変なものではなくなっていると思います。

外国人という理由で理不尽な仕打ちを受けたり、コミュニケーションが上手く図れなくて情けない思いをすることは頻繁にあります。でもその度に同じ目に合わないようするにはどうすればいいのか、今の自分に足りないものは何なのか見つめ直す機会にもなります。文化もマナーも違う国で生きていくのは簡単なことではありませんが、常識に捉われず自分自身、そして他人と向き合うのには良い経験だと思います。マイノリティだからこそその強みもたくさんあります。顔をすぐ覚えてもらえたり、日本に関する話題で話しかけられることも多いです。またオーストラリアでは違うバックグラウンドを生かして成功した人がたくさんいます。今最も勢いがある鉱山会社のCEOは中国人であり、留学生が占める割合をみても国際性の高さは明らかです。苦労もありますが、チャンスも多い場所です。

私が留学の機会を掴めたのも運と愛想のよさだけではなく、自分自身の努力、そして何よりも周りの支援のおかげだと感じています。弱音を吐くこともあります。ここまでこれたことを誇りに思い、応援してくれた方々への感謝の気持ちを胸にこれからも突き進んでいこうと思います。当面の目標は卒業ですが、その後はオーストラリアにある鉱山でエンジニアとして経験を積んでいきたいと考えています。そしていつか自分も他の人に刺激を与えられるような存在を目指しています。



鉱山の現場見学にて



地域の異文化交流祭に日本代表として参加

暁木会年会費納入のお願い

平成 15 年度から導入いたしました年会費につきましては、現在、1,000 余名を数える会員各位にご理解とご協力をいただいています。本誌をもってお礼を申し上げます。

しかしながら、暁木会の安定した運営を行うためには未だ十分ではありません。現在、KTC のメーリングリストや、クラス幹事、各職場の世話人を通じて会費納入の依頼を行っていますところ。会費会員へのサービスとしては、暁木会ニュースおよび会員名簿の発行をさせていただいております。会費納入の手続きが未了の会員各位には、手続き関連書類を送付いたしますので、下記の連絡先にご連絡くださいませ。よろしくお願い致します。※年会費の集金方法につきまして、現在、集金代行業者（三菱UFJニコス株式会社）に委託し、会員の指定金融機関から年 1 回の自動引落しの制度を採用いたしております。

